

令和6年1月2日

南の風新春特集号

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

新年明けましておめでとうございます！ 本年も『南の風』をどうぞよろしくお願いいたします。

新春のご挨拶の中で、元大リーガーのイチロー氏の提言を紹介しました。イチロー氏は、「厳しいことを言ってくれる大人が激減したことは、Z世代の若者にとっては非常に酷なこと」と言っています。

この特集号では、「酷なこと」をもう少し深掘りして見たいと思います。

近年のハラスメントや体罰の温床となっていた、軍隊的な体育会系の指導を受けずに済むことは、時代感覚のアップデートであるように思えるし、子どもたちにとっては「いいこと」であるように感じます。だがイチロー氏はこれを諸手を上げて賛同していません。「酷なこと」と言っているのです。

なぜなら、これは一見やさしさをまとっているが、しかし同時に若者たちに「剥き出しの自己責任」を課していることと表裏一体だからです。イチロー氏が述べるように、ある時代までは、自分で自分を厳しく律することができない人であっても、その人の近くにはきっと「厳しい大人（先輩）」がいて、その人の自堕落や怠け癖を厳しく指導してくれていました。

だからこそ自分を甘やかして易きに流れるようなものでも、どうにか脱落することなく、それなりのクオリティに仕上がることができていました。特に若者は遊びたい盛りなのだから、自分でそうした欲望を厳しく律して生活するのは容易ではありません。

だが現在は甘えや怠けを容赦なく指弾する「厳しい大人」をやってくれるような人が若者の周囲にはいなくなってしまいました。例えば、甲子園の常連で何名ものプロ選手を輩出する名門野球部でさえ、かつてのような「しごきあげ」ができなくなっています。

それは若者側の視点からすれば、ひと昔前まで横行していた時代遅れの「昭和」な香り漂う暴力的な規律や統制を受けなくて済むことにほかならず、社会生活や社会活動の快適性が高まっているといえます。しかしそれは、「自分で自分を厳しくコントロールできないものは、（だれからも指導されたり、矯正されたりすることなく）そのまま放置される」ということのコインの裏表でもあります。

————— 「責任を負う人」がいない時代 —————

これはスポーツにおける指導や学校の部活動に限った話ではなく、一般企業の教育・指導にも共通した問題ではないでしょうか。今は上司や管理者が部下に厳しい指導をしようにもハラスメントとして告発されてしまうリスクが高いし、あるいは厳しい指導をしたせいで心が折れたり、気持ちが萎えたりして辞められてしまうのは、人手不足の状況では死活問題になってしまいかねないため、うかつに踏み込めないことが多いのです。なので、教育者・指導者側もまず「自分で自分を厳しく律することができる人」、「厳しいフィードバックに耐えられるタフネスがありそうな人」を慎重に選んで注力するようになっています。心が折れて辞められたりすることがないよう腫れもの扱いしながら敬遠します。

結果的に、自分に厳しくできない人や厳しいフィードバックに耐えられない人は、表面的には学校でも部活でも会社でも、それなりに「やさしく」遇されやすく快適な日々を送ることができますが、タフな人たちに経験値や成長度で大きな差をつけられてしまいます。 次号にします。